

# 記念館展示室より愛知大学の原点を知り学ぶ

—資料の前に立って—

東亜同文書院大学記念センター／  
オープン・リサーチ・センター客員研究員・運営委員 **越知 専**

5年に一度の愛知大学同窓会全国総会が、11月3日豊橋で開かれた。1,280人が、愛知大学記念館や、懇親会場の日航ホテルを埋めつくした。愛知大学東亜同文書院大学記念館にも300人余が見学に来た。昨年春リニューアルオープン（詳細は別項で紹介）した大学史展示室（A）、（B）につづいて展示室（C）は、愛知大学名誉学長本間喜一コーナーとして新設され、11月1日に完成した。

これを機に“議論発想山本ゼミ”（豊橋）や“黒柳ゼミ”（名古屋）“大学史の講座”を受講する学生で賑わった。（詳細は別項で紹介）

東亜同文書院や孫文の資料、愛知大学60年の歴史コーナー、特に卒業生が関心を持たれたのは愛知大学事件と薬師岳遭難の事故であり、そうした事件事故を精力的に処理した中心人物本間喜一名誉学長の手腕行動力を賞賛する声が高かった。資料を見ながら「凄い」「鳥肌が立った」「こんな事実があったのか」とたくさんの意見が寄せられたが、今回は在校生の生の声を記してみる。

平成19年から愛知大学では、共通教育科目として「大学史」の講座が開かれて、大学史の一般論、愛知大学の設立（東亜同文書院大学の継承）と、その後の歴史を講義している。「自分が入学した愛知大学とはどういう大学」であるか、をしっかりと認識するためのものでもある。

平成19年6月22日、准教授葛谷登先生担当の経済学科一年生に対して、筆者が行った約40分

のスライドを使っでの授業体験を記してみよう。

葛谷先生は一橋大学院の社会学修士、本間喜一橋大学名誉教授についても見識が深い。従って、受け持ちの学生に対して、筆者の講義に対する「事前質問」をまとめて下さった。

以下はその主な質問例である。

- (1) 当時の愛知大学は、周りからどのように見られていたのですか。（賢い大学、中国系の大学など）
- (2) 当時は学生食堂はあったのですか。
- (3) 愛大事件について詳しく聞きたい。
- (4) 今と昔で愛知大学が変わっているところ。
- (5) 充実した学生生活を送るために心がけることはありますか。
- (6) 愛知大学の一番良いところは何ですか。
- (7) 一番印象に残った出来事は何ですか。
- (8) 行きづまった時はどのようにして乗りきりましたか。
- (9) 仕事で一番大切な事は何ですか。
- (10) 本間喜一先生はどんな人ですか。一番印象に残っていることは何ですか。

そこで筆者は次のレジュメを作ってこと細かに紹介した。（詳細講義内容はテープに保存してあるので何かの機会文書化する。）

6月27日（水）1時限 経済学科一年

—事前問を3項目に集約した—

- (I) 愛知大学（創成期・現在）の社会的・客観的評価

## (Ⅱ) 愛知大学事件と社会的背景

本間喜一名誉学長の間像  
(薬師岳遭難事故)

## (Ⅲ) 創成期の学生気質と現在生

次に、昨年11月1日名古屋三好キャンパスの学生達が、愛知大学東亜同文書院記念館を見学した時のレポート。用紙にして50枚弱、文字にして25,000字以上の文や対話の中から抜粋してみよう。

- (1) 「自分が入学した大学はどういう大学か良く分かり、どうして愛知大学を選んだのか改めて確認した」
- (2) 「自分の好きな学部を選び、専門的な資格取得や研究する」
- (3) 「不本意だが偏差値によって入学を決めた」
- (4) 「交通の便が良いという選択もあったが、伝統に魅せられた」
- (5) 「同文書院時代の学籍簿、成績簿を終戦時に何よりも優先してリュックサックにつめて日本へ運んできたことに感動し、さらに同文書院時代の14万枚の中国語カードが返還され、日中大辞典の編纂に至ったことに日中友好の絆がますます強まっていると感じた」
- (6) 「1952年の愛知大学事件では、当時の本間学長が、学生は私にとって3親等以内のものといって病気の妻を娘に任せ、大学や学生を守ったことに感動した」
- (7) 「薬師岳遭難事故では、生命は地球よりも重い、といって生命の大切さ、学生を大事にする本間学長の思いにとてもすばらしく暖かいものだったと思った」
- (8) 「一番印象に残ったのは本間喜一先生だ。先生はどうしてそれまでしてというぐらいに愛知大学に生涯を捧げた。それほどまでに愛知大学を愛していたのだろう」
- (9) 「地域に貢献するという郷土研究所は、愛知・岐阜・三重・静岡・長野南部まで研究エリアとしており興味深い」
- (10) 「豊橋キャンパスは交通の便が良く愛知大学前駅に隣接し、名古屋キャンパスの学生にとってうらやましい」
- (11) 「名古屋キャンパスに比べて緑も多くゆとりがあり、愛大の本部と呼ぶにふさわしい」
- (12) 「短大本部跡旧借行社が現在物置状態になっている。歴史的価値を持つ建築物であるので、何らかの形で活用していただきたい」
- (13) 「私がこの科目をとった動機は、最初は単にとる科目がなかったからで、安易な気持ちで講義に出席したが、いつしかこんな気持ちは消え去った。本間喜一名誉学長をはじめたくさんの方々が築いた愛知大学の精神を学ぶこと、書院の学生に負けないよう勉強していきたい。そんな気持ちで大学生活を送りたい。今回のキャンパスツアーに参加して今後の自分に活かせるものを得たと感じている」
- (14) 「戦後法曹界の三人の重鎮、三淵忠彦初代最高裁長官・田中耕太郎2代長官・本間喜一初代最高裁事務総長の図。恩師・同窓の関係と愛知大学との繋がりを見て、愛大がロースクールの評価が高いことを知った」
- (15) 「このキャンパスツアーに参加して感じたことは、愛知大学とはこれほど歴史があり誇りの持てる大学なのだと確認できた」
- (16) 「ガイドの方々がとても熱心に説明しており、はじめはなぜこんなにも一生懸命なのか戸惑ったが、皆さんが大学に誇りを持っており、僕たち学生にも同じ気持ちになってほしいのだということを感じた」
- (17) 「特に本間喜一名誉学長は二度と名前を忘れないほど頭に残った。人の上に立つ人間として、最も素晴らしい人だと感じた。また、応援団には目が丸くなるほど驚いた。愛知大学にいる以上応援団の存在を知っておいた方が良かったと思った。自分の通う大学を知ることは当り前で学ぶ必要性を感じた」以上。

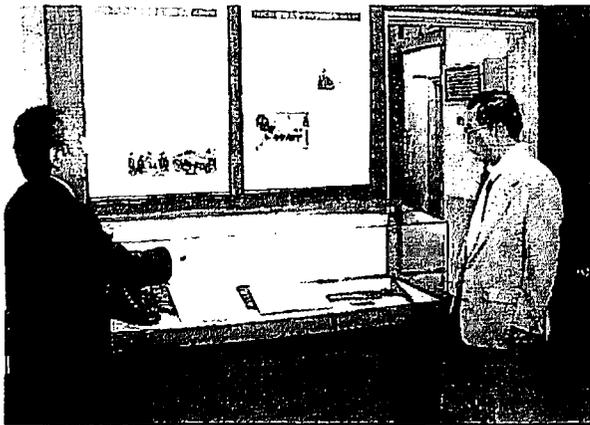
〈写真説明〉

- A. 薬師岳遭難事故の本間学長の「おわびの手記」は本間イズムを如実に現わすもの、全国の市民・学生・会社などから救援資金がぞくぞくと寄せられた。
- B. 薬師岳遭難事故で、当時富山県警本部の警備部長として、救援活動に全面協力した中根三郎氏（28年法卒）右と当時の写真資料について語り合う筆者（28年経卒）。
- C. 本間喜一名誉学長について説明する葛谷准教授（新設された音声ガイダンスシステムを持つ記念館講義室にて）。
- D. 名古屋校舎の学生に講義する客員研究員の筆者（本間喜一名誉学長展示室にて）。
- E. 名古屋校舎の学生から寄せられたレポート。

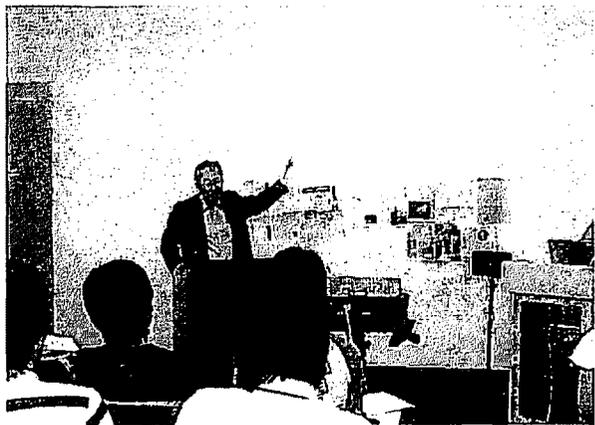
〈A〉



〈B〉



〈C〉



〈D〉



〈E〉

